

いまい小児科クリニック 所長 今井博之

(注) この文章には、政府見解とは異なった内容が多く含まれております。今井所長が入手できる海外からの最新報告をもとに、できるだけ正確に、重要な情報をお届けすることを目的としておりますが、時には所長の主観もまじえて書いておりますことを御了承ください。

前回の「No.2」では、子どもが新型コロナウイルスにかかったらどういう症状が出るのかの最新情報をお伝えしましたが、その時までにたった2つの論文しかありませんでしたが、その後、新たに3つの論文がでましたので追加でお伝えします。

文献7：中国における新型コロナ感染小児例2143例の疫学的特徴（公表3月16日）Pediatrics

年齢は、生後1日～18歳（平均7歳）。1歳未満18%、1～5歳23%、6～10歳24%、11～15歳19%、15歳以上16%。年齢が低いほど発症しにくいと言われていましたが、実際には0歳を含めて、どの年齢も同じくらい発症しています。

男：女比は、6：4と男にやや多く、これは成人例とほぼ同じ。

年齢別重症度は、下記の通り。重症と重体を合わせた数は、小児では6%と成人の19%よりは低くなっており、従来の報告通り小児は成人より重症化しにくいという結果で、死亡例も非常に少なく、この研究対象では死亡例は14歳の男子1名のみ。

ただし、小児の中だけで見ると、0歳児の重症+重体は11%にも及んでおり、小児の中では乳児は要注意です。

	無症状	軽症	中等症	重症	重体
0歳	2%	54%	34%	9%	2%
1～5歳	3%	50%	40%	3%	0.4%
6～10歳	6%	53%	37%	4%	0%
11～15歳	7%	48%	41%	3%	0.7%
15歳以上	5%	49%	44%	3%	0.3%
18歳未満合計	4%	51%	39%	5%	0.6%

文献8：小児における新型コロナの特徴（公表3月16日）Pediatrics

PCR陽性の小児のうち約13%は全く無症状でした。症状のあった小児でも呼吸困難に陥ったのは5%に過ぎず、呼吸窮迫症候群に陥ったものはさらに少なく0.6%でした。就学前の小児は、小学生以上の子どもよりも悪化しやすい傾向があり、成人と同様に基礎疾患があるもの、免疫の低下したものが重症化しやすいようです。小児は下気道だけではなく、上気道にもウイルスを持っている傾向があり、便の中にもウイルスを出しているため、地域での流行にかなりの影響を及ぼしているのではないかと推測されています。

新型コロナウイルスに感染した妊婦からの出産は、全例帝王切開で、生まれた新生児はただちに母から隔離されたため、垂直感染例は今のところ出ていません。

文献9：小児の新型コロナ感染症（公表3月18日）NEJM

171人の小児例のまとめ。年齢は、生後1日～15歳（平均7歳）。0歳（18%）、1～5歳（23%）、6～10歳（34%）、11～15歳（25%）と、どの年齢もほぼ万遍なく発症。無症状者が16%、上気道炎（かぜ）が19%、肺炎が65%と、肺炎の率は高い。感染経路は約90%が家族内感染で、経路不明は9%に過ぎません。

症状および所見は下記のとおり。

咳	49%	下痢	9%
のどが赤い	46%	嘔吐	6%
発熱	42%	倦怠だるい	8%
発熱期間	平均3日（1～16日）	鼻みず	8%
最高体温 <37.5°C	59%	鼻つまり	5%
37.5～38.0°C	9%	SPO2<92%	2%
38.1～39.0°C	23%	入院時の多呼吸	29%
>39.0°C	9%	入院時の頻拍	42%

今までの報告通り、発熱期間は平均3日で、1日で解熱することも多く、39°C以上の高熱は少なく、かぜと違って鼻水もほとんど出ないという特徴があります。ただし、成人と異なり子どもでは約半数にのどの発赤がみられます（成人では1割以下）。症状が軽いにもかかわらず肺炎になっている例が多いのが特徴で、呼吸数や心拍数が早い例に注意が必要です。

文献7) Pediatrics March 16, 2020. 文献8) Pediatrics March 16, 2020. 文献9) NEJM March 18, 2020